

ゆるされし

■ 楽曲データ

歌詞：大木惇夫 作詞

楽曲：平井康三郎 作曲

発表：仏教讃歌刊行普及会 1952年

初演：—

初出：『BUKKYO SANKA』 佛教讃歌刊行普及會 1952年

管理番号：M0658

■ 創作の経緯

戦後まもなく「新しい仏教讃歌を」との趣旨で、西本願寺内に「仏教讃歌刊行普及会」が設立され、1952（昭和27）年、同団体より混声四部・女声三部・男声四部の3編成で発表された。

詞は、詩集『海原にありて歌へる』（アジヤラヤ出版部、1942年）に「死生感」というタイトルで収録されている。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第2巻収録

底資料：『BUKKYO SANKA』 佛教讃歌刊行普及會 1952年

比較資料：—

校訂の詳細：特記事項なし

■ 解説

歌詞は、阿弥陀さまの大慈大悲の本願（根本の願い、私たちの願いに先立って起こされた如来さまの願い）のなかに、生きている人間の姿を歌っています。

一つの言葉で喜び、一つの事件で悲しみにうちひしがれ、人や自然にゆるされて生きている私たちですが、お聴聞を重ねていきますと、やがてすべてが阿弥陀さまの願いのなかに生きていることをうなづく身となります。そして、吉凶禍福（きっきょうかふく）に惑わされることのない人生の道が明らかになってまいります。この世における利益（りやく）として、無碍の一道を歩む力を賜るのではないのでしょうか。

お釈迦さまが「人生は苦なり」と説かれ、生老病死（しょうろうびょうし）の四苦をお示しくくださったように、娑婆の縁が尽きる死は、誰も逃れることのできない厳粛な事実です。私たちはどのような死に際を迎えるかわかりませんが、その死の間際、でき得れば「この世にいのちをいただいてよかった」と、

ほほえみながら眼を閉じたいものです。

阿弥陀さまは、「何も心配することはないよ。必ず真実の世界、お浄土に迎え取りますよ」と、十劫の昔から私たちを呼び続けてくださっているのです。

◆作詞者について

作詞の大木惇夫は、1895（明治28）年、広島市に生まれ、1977（昭和52）年、82歳で亡くなりました。広島県立広島商業学校（旧制）を卒業後、3年間銀行に勤めたのち、博文館に勤務。1922（大正11）年、『詩と音楽』に詩作を発表し、北原白秋門下の詩人として活躍しました。詩集『海原にありて歌へる』で第1回大東亜文学大賞（次賞）を受賞しています。仏教讃歌では、他に《他力念仏詩抄》《世を明るく》などがあります。

◆作曲者について

作曲は、《衆会》《咲き匂う》などを書いた平井康三郎です。1910（明治43）年、高知県に生まれ、東京音楽学校（現・東京芸術大学音楽学部）本科でヴァイオリンを学びました。お釈迦さまの降誕をテーマとした交声曲《大いなる哉》で、作曲家としてデビュー。《平城山》《ゆりかご》など、数々の日本歌曲を作曲しています。

◆歌い方について

- ①大変味わい深い詩です。はじめに詩を何度も朗読してみましょう。
- ②4分音符＝50は、秒針よりもゆっくりした速度です。息をたっぷり吸って歌いましょう。
- ③全体にレガートに（なめらかに）歌い、8分音符がこま切れにならないように気を付けましょう。
- ④1小節目の出だし「ゆ」が遅くならないように、十分準備を整えて歌いましょう。特に、ピアノ伴奏の場合は、左手の4分音符をはっきりと弾きましょう。
- ⑤2小節目「ソ」→「ド」の音程を、しっかり取りましょう。「い」は軽くアクセントをつけて。
- ⑥4小節目「か」の発音をはっきりと。
- ⑦5小節目後半から、少し曲の雰囲気が変わります。明るく歌いましょう。
- ⑧6小節目「ミ♭」→「ド」の音程も難しいので、気を付けて練習しましょう。
- ⑨8小節目「め」は、大きく強い声で、8分音符分の長さを保ちましょう。
- ⑩9・12小節目のアクセントをしっかりと歌いましょう。
- ⑪10小節目の「シ」はナチュラルです。音程に注意しましょう。
- ⑫14小節からは転調し、長調になります。荘厳に、しかも明るく歌いましょう。

⑭曲の最後の音である18小節目「ド」は、伸ばしている間に音程が下がらないように、しっかり保ちましょう。

◆用途など

追悼法要や報恩講などで歌ってみてはいかがでしょうか。

◆楽譜・音源

原曲は混声四部合唱です。楽譜は『聖歌・讃歌集』第2巻、音源はCD『いのち』をご参照ください。

また、二部合唱版が『讃歌集 二部合唱』第7巻に掲載されています。音源はCD『讃歌集二部合唱 あの空見れば』に収録されています。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 39（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第171号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.